

小中学校の規模が生徒の人間関係の構築方法に与える影響

1200527 森田 健介

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

私自身が小規模校で生活していたことで感じていた小規模校は人間関係の構築能力が大規模校に劣っているのではないかと、という仮説から研究を行うことにした。本研究では、高知工科大学の7人の学生を対象にインタビューを用いて小中学校時の印象に残った喧嘩のエピソードを聞き、喧嘩の発生から関係の再構築に至るプロセスが学校規模に左右されるのか、されないのかを調査した。その結果、喧嘩の発生から関係の再構築に至るプロセスは確かに学校規模に左右されていることが分かった。

2. 動機・背景

私は小学生時、中学生時ともに1学年1クラス、全校生徒も100人を切る小規模の学校に通っていた。その影響で、高校時の1学年320人という生徒の多さに圧倒され、知り合いがいない中で友達作りや初めてのクラス替えに苦労した。

この経験から小規模校の生徒は人間関係の構築能力が大規模校に比べ劣っているのではないかと考えた。

また、現在日本は深刻的な少子化に陥っており、年少人口は1980年代初めの2700万人規模から減少を続け、2015年には1500万人台まで減少している[1]。そのため、今後小中学校が過度に小規模化したときに統廃合を行うべきなのかを判断するためにも調べる必要があると思い本研究を行うことにした。

3. 先行研究

高橋(2018)によると、「小学校では小規模校のほうが不登校者の割合が小さくなることが分かっている。その理由としては、教師が児童一人一人に割ける時間が大規模校より多く、きめ細やかな対応をすることができることが挙げられる。」とあり[2]、私が持っていた仮説とは異なり小規模校の方が優れているという結果となっている。

また田邊、鶴田(2018)では、「友人関係における失敗体験

や成功体験の有無と友人関係構築に関する認識との関連をみると、喧嘩の経験や自ら仲直りをした経験があり、相談者がいる人の方が、それらの経験がどれか1つしかない人と比べて、世の中にはいろいろな考えを持った人がいると思い、自分らしく生きて良いと思うと同時に、友達の考えも大切にしようと思っていた。」[3]この研究を参考にし、本研究では生徒の喧嘩の経験に着目することにした。

4. 目的

先行研究では述べられていない学校規模が生徒間に与える影響について明らかにする。具体的には、喧嘩の発生から関係の再構築に至るプロセスが学校規模に左右されるのか、されないのかを明らかにする。

これにより、小規模の学校は統廃合をすべきなのかどうかの判断要因とする。

5. 研究方法

インタビューを用い、高知工科大学の学生を対象として小中学校時の印象に残っている喧嘩のエピソードを聞く。また、小規模校の定義を1学年1クラスでクラス替えのできない環境の学校とする。

インタビューの書き起こしを行い、学校規模による違いを探る。

6. インタビュー結果

高知工科大学の学生7人にインタビューを行った。それぞれのインタビュー内容を要約したものが以下である。

事例1 A氏 高知工科大学3年 男性
中学校時 1学年7クラス

A氏はソフトテニス部に所属していた。部活の練習時、同じクラスではないが仲の良かった友達1、2がしつこくいじってきた。堪忍袋の緒が切れたA氏は怒りをあらわにし、その日

は一言も話さず練習が終わった。その日の夜中、友達1がSNSで謝ってきたことで仲直りをした。A氏は1と仲直りをしたことで2とも仲直りをしないといけないと思ったが、自分から謝るのが癪だった、またクラスが違うため謝るタイミングが少なく、2とは仲直りをすることが出来ないういた。仲直りが出来ないまま1週間が過ぎた後の部活の練習時、運悪く練習のペアになってしまう。気まずいまま練習をしていたが、プレーの途中でA氏に対して声掛けをしてくれたことでA氏は仲直りができる状況にあると思い、練習後謝った。その後1、2は以前のようにしつこく絡んでくることはなくなり、喧嘩前より仲良くなることができた。

事例2 B氏 高知工科大学3年 男性

中学校時 1学年 27人1クラス

B氏はバスケットボール部に所属していた。練習開始直前、友達が突然顔にボールをぶつけてきたことで頭に血が上り、取っ組み合いの喧嘩になった。その後周りが喧嘩を止め練習が始まったが、喧嘩の原因が相手にあったため怒りが収まらず、相手のことを許してやらないと思っていた。B氏は今日1日は話すことはないだろうと思っていたが、喧嘩をしてから10分ほどたった後に、まるで喧嘩などなかったかのように相手が話しかけてきた。B氏は喧嘩をしてから少し時間がたったことで冷静になり相手を許すことにした。なぜなら同じクラスで毎日顔を合わせるのだから、喧嘩をしたままでは教室に居づらくなると思ったから。その喧嘩後、二人の関係は喧嘩前と変わらない状態に戻っていた。また、ちょっかいをかけられ喧嘩になっても毎回謝罪の言葉なく、すぐに何事もなかったかのように元の関係に戻っていた。

事例3 C氏 高知工科大学4年 男性

中学校時 1学年約300人

後ろの席に座っていた友達が授業中に消しゴムのカスを投げてきた。よくちょっかいをかけてくる友達だったため、一度痛い目にあわそうと思い授業終了後に友達を殴った。涙目で教室を出ていった友達はそのまま帰って来ず、不在のまま次の授業が始まった。その授業中、担任の先生に呼び出されたC氏は先生の仲介のもと、喧嘩の事情聴取をされ、喧嘩の

仲直りをさせられた。しかし、仲直りをした後もその友達はちょっかいをかけることはやめてくれなかった。

C氏は今思い返してみると、先生がいつも喧嘩の間に入って仲直りをされる役割をしていた。当事者だけで謝るという行為が恥ずかしかったため、子供達だけの仲直りは少なく、今回の喧嘩でも先生がいなかったら絶対に謝っていなかったと言っていた。

事例4 D氏 高知工科大学4年 男性

小学校時 1学年 60人2クラス

小学校3年生の時に、同じクラスになった友達と仲良くなり、よくお互いの家に遊びに行くほど仲が良かった。4年生になっても同じクラスだったが、学年が上がってからD氏に対してちょっかいを出してくるようになった。ちょっかいを出され続け、我慢の限界に達したD氏は休み時間に教室でその友達を殴り喧嘩になった。周りで見ていたクラスメイトがすぐに喧嘩をとめに入ったため、喧嘩を聞きつけた担任の先生が現場にやって来た時には喧嘩は落ち着いていた。また、先生はその場でなぜか事情聴取や仲直りをさせなかった。

翌日、学校に行くことへの気まずさを感じ、仲直りの必要性を感じていたが、仲直りのやり方がわからない、謝るのが恥ずかしいという思いがあり仲直りをできずにいた。また、先生に呼び出されるだろうと思っていたにもかかわらず、なかなか呼ばれないため、むしろ早く呼んで仲直りをさせてくれれば気が楽なのにと思っていた。そしてその日、学校のグラウンドで草むしりをする時間があり、やっと先生に呼び出され、仲直りをするようになった。しかし、仲直りはしたが以前のように遊ぶことはなくなってしまった。

D氏は今思い返してみると、先生は生徒同士で仲直りをさせたかったためすぐに喧嘩の間に入らなかったのではないかと考えていた。

事例5 E氏 高知工科大学4年 男性

小学校時 1学年 60人2クラス

中学校時 1学年 120人3クラス

E氏は、中学生の時に喧嘩をした経験があまりなく、友達と揉めた時に口では勝てないから自分から引いていた。そして、ため込んだイライラや不満を先生や親に言うことで発散して

いた。E氏は、先生に言う時はいつも、相手には何も言わないでくれということ伝えていた。なぜなら先生が相手に言ってしまうと、「先生に何か言っただろ」とまた喧嘩が起ってしまうからだ。

E氏がこのような対処法を行うようになったのは、小学生の頃は不満があった時に直接相手に文句を言ったりしていたが、言い方が悪く言葉に棘があり揉め事を大きくしてしまうことがあった。そのことを先生に指摘されたE氏は、言い方を変えたり、自分の中にため込んだりするようになった。E氏にとって、先生は味方であり一番頼れる存在だった。

事例6 F氏 高知工科大学3年 男性
 小学校時 1学年約100人
 中学校時 1学年約200人

小学生の頃は喧嘩がおきた時、まずは職員室に来なさいという教え方をされていたため、少しでもいざこざが起きたらすぐに先生の所に行くのが普通だった。また先生が怖く、誰が悪いは関係なく怒られていたため、怒られているうちに喧嘩のことはどうでもよくなり、自分は悪くないのに怒られることに不満はなくなっていた。また、仲直りした後はいつもの関係に戻ることが出来ていた。いま思い返すと、もし先生が喧嘩に介入しなかったら元通りの関係になっていなかったかもしれないとF氏は言っていた。

中学校では、喧嘩をしたらどちらかが負けるまでやめないということが普通だったため、先生に言いに行き解決させるようなことはあまりなかった。

事例7 G氏 高知工科大学3年 女性
 小学校、中学校ともに1学年1クラス

自分の周りで喧嘩が起こった経験はあまり多くないが、揉め事などで人が出てしまうほどの大きな事態があった場合は先生を呼んで解決し、軽い言い合い程度の場合は周りの人が間に入って止めていた。なぜなら、小規模校のためクラスのメンバーがずっと変わらず、中には小学校に入る前からの友達もいるため、クラスメイトそれぞれの性格を把握することが出来ていた。そのため、揉め事があった場合でも周りが止めに入りやすい環境にあり、揉め事が喧嘩になることも少なかったのではないかとと思う。

7. 考察

インタビュー結果で紹介した7つの事例をもとに、生徒が関係再構築に至るまでのプロセスと学校規模との関係性を考察する。

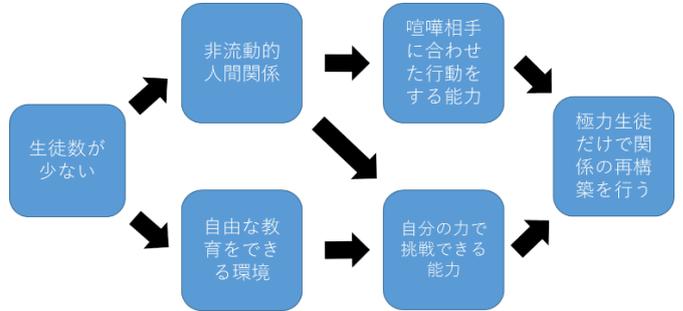


図1 小規模校における生徒の人間関係と喧嘩との関連図

小規模校では、生徒数が少ないことによりクラス替えがないため、非流動的な人間関係になる。そのため、同じクラスメイトと長期間生活することとなり、お互いの長所、短所、性格への理解度が高まることで相手の表情や態度から思考を読む力が向上し、喧嘩をした時に相手に合わせた行動をとることが出来る。

また、生徒数が少ないということは先生が目を生徒全員に行き届かせることが出来る。そのため、ある程度生徒の自由にさせても收拾がつくので、生徒の考え、行動を尊重した教育を行うことが出来る。そうすることで、生徒が自分の力で挑戦する能力を培うことが出来る。

この二点により、小規模校の生徒は極力生徒のみで関係の再構築を行っていると考えられる。

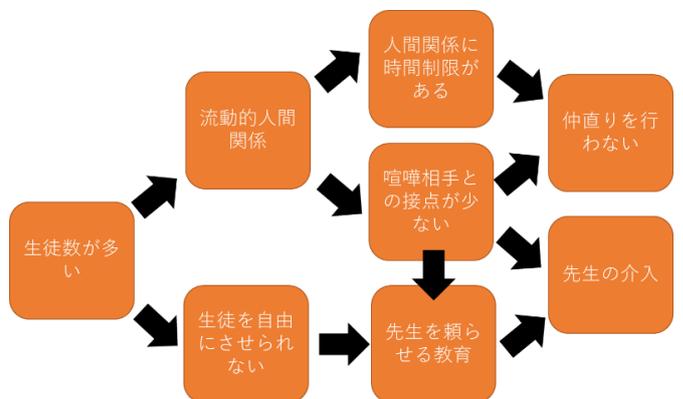


図2 大規模校における生徒の人間関係と喧嘩との関連図

大規模校では、生徒数が多いことで流動的な人間関係にな

る。そのため、喧嘩相手との接点が少なくなることや、1年に1度クラス替えがあるため時間がたてば喧嘩相手に会わなくてもよいことにより、仲直りをしないという選択肢を取ることができる。

また、生徒数が多いということは先生が生徒それぞれの行動を把握することが難しくなる。そのため、生徒の行動に制限をかけなければクラスの秩序を維持することが出来なくなる。具体的には、事あるごとに先生に報告させることで生徒の行動を把握できるようにしているのではないかと考えた。そのため、生徒は喧嘩が起きた時にも先生を頼っているのだろう。

上記のことから、喧嘩の発生から関係の再構築に至るプロセスは学校規模に確かに左右されていることが分かった。

8. 今後の課題

今回の研究で得られた結果は、一学校内での生徒の行動原理と能力である。そのため、小規模校の生徒が大規模校に進学した場合や他校との合同学習のような、異なる環境下に置かれた場合に生徒の持っている能力が発揮されるのかを調べる必要がある。

引用文献

- [1] 内閣府経済社会総合研究所 (ESRI) 「データ編」
http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou063/hou63_10.pdf
- [2] 小規模校は社会性が育ちにくいのか？－小中学校の不登校割合を用いた分析－ 高橋淳一郎 (日本文理大学商経学会誌 2018-03 36巻 p19-28)
- [3] 中学生の友人関係の実態と友人関係構築に関する実態－思春期ピアカウンセリング講座実施時の調査から－ 田邊綾子 鶴田来美 (日本健康医学会雑誌 2018年 26巻 4号 p 241-247)